The sad boy who protects darkness

真嶋雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｈｅ　ｓａｄ　ｂｏｙ　ｗｈｏ　ｐｒｏｔｅｃｔｓ　ｄａｒｋｎｅｓｓ

【Ｎコード】
Ｎ２４６５Ｄ

【作者名】
真嶋雪

【あらすじ】
存在意義を求める青年、上村光貴。とある組織の超一級エージェントである彼と、その周囲の人達の物語。※内容大幅に変更中です。

Beginning

憎い。
俺から全てを奪った全てが憎い。

憎い。
全てを奪われた俺の弱さが憎い。

俺の存在意義はもはや無い。
ああいっそのこと死んでしまおうか。
死後の世界、なんてものは信じて無いけれど。
このまま何もできることもなくただ生きるよりは
――ずっと良い。
「何もできることが無いだなんて何故分かるの？」
「…？」
「君は以前の僕に似ているね」
土砂降りの雨で視界が滲み、誰なのか分からない。
「憎しみに満ち溢れて、でも何をすればいいのか分からなくて…」
「何故知ってる…」
「君の目が前の僕の目と同じだったから」
今考えれば、あほらしい。
でも、そのときの俺はそうは思わなかった。
思っていることを汲み取ってもらえて嬉しかった。
「…ねえ、僕たちのところに来ない？」
「…お前、の？」
「うん。たくさんの仲間がいる。辛いところだけど、危険もあるけど―何もしないで死んでしまうよりは良いと思うよ」
どうかな、と続けるそいつの言葉に、
俺は別段迷うこともなくうなずいた。

そしてまた俺は生気を取り戻した。
そして俺は今の俺になった。

Ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ（後書き）

二つ同時長編なんて無謀なことをしてしまいましたｏｒｚ
どちらも頑張りますので、どうか楽しんでいただければ幸いです。

瑠璃色　1

表向きは例えるところのよろず屋。人探し、浮気調査はもちろんカウンセリングや人生相談などさまざまな分野を完璧にこなす、値段も普段はお手ごろな「雪内探偵事務所」。

実際は世間の言葉を使うと犯罪屋。もちろん事務所のこちらの顔を知っている者は数少ないのだけれど、それなりの実績を持つ「クルエルクリミナル」。通称はクルクリとまあ、仕事内容に反して可愛らしいもの。

そこが彼、光貴の仕事場であり、同時に居場所でもあった。あの日何もかもを失ったと絶望したあの日から、彼の、唯一の。

今日もまた仕事の依頼がきた。

「あの…仕事の依頼、できますか？」

時刻は大体正午を過ぎた頃。光貴が事務所のリビング（主にお客様の依頼内容を聞くときなどに使う）の奥にある自室のベッドで寝転がりながら分厚い推理小説を読んでいたときである。このペースで進めば昼食までには半分まで読めるだろうというところで、インターフォンが鳴った。こなす仕事は雑用から、というのが彼のモットーのうちの一つであるので、適当に衣服を整えてから客を出迎えに駆け足で玄関へ向かい（その際、所長たちがリビングでぐうたらくつろいでいるのが目に入った彼は、お前出ろよと思わないでもなかった）、ドアを開けたときに聞こえたのがそんなセリフだった。自分より下から聞こえた、かなりひかえめな声の持ち主はなんとも小柄で華奢な女性であった。その女性に一つ頷き、光貴は事務所の中へ通した。

玄関からリビングまでには二つドアがあり、そのドアの間には少

し短めの廊下があった。客にそこで少し待っていただけるようにお願いしてから奥のドアを開けてリビングの様子を見る。客に対して失礼が無いようにするためなのだが。

「…何してる」

思わず目に入った光景に光貴はリビングに一瞬で入り込み瞬時に後ろ手にドアを閉めた。そのことに対し客が少し戸惑った様子を見せたがそれは少し我慢してもらう。

「何って…お客様のお出迎えに決まってんだろー！やだなー光貴」

「決まってんだろじゃないです、飛鳥（あすか）さん。早くそれ取ってください。幼稚園児のお遊戯会ですか」

「ま、ま、飛鳥も頑張って作ったんだしさ、それくらいは良いだろ。それよりこのケーキどうかな。小さすぎるかな」

「どう考えてもでかすぎですよ遼太郎（りょうたろう）さん。貴方基準に物事を考えないでください」

椅子を使って壁中に折り紙で作ったかなり不恰好な輪っかを貼り付けている小柄な男、飛鳥に取るように指示し、なだめながらキッチンから出てきた高身長な男、遼太郎にピンク色のエプロンを外すように言う。ちなみに飛鳥という男はこの事務所の所長であり、実際はそれなりに器用なので不恰好な輪も最初は綺麗だったのだ。だが飛鳥がそれを気に入り何度も何度も（注意されながらも）使っているうちにすっかりぼろぼろになってしまい、今となっては飾ってもただの嫌がらせにしか見えない。

「…まあ、それくらいで良いですか。通しますからね。粗相の無いように、くれぐれもお願いしますよ」

念入りに二人に忠告してから廊下に取り残してきてしまった女性に丁寧に謝り、リビングに通す。今度は普通の質素な事務所になっていた。ただ、テーブルの上には大きなケーキが乗っていたが。

「じゃ、所長。お願いします。紅茶とコーヒー、どちらになさいますか？」

「あ、それじゃあ紅茶を…」

「分かりました」
すぐ傍のカウンター席に並ぶ湯沸かし器の電源を入れてカップを四つ用意する。女性には所長が座っている前のソファに座ってもらった。所長がいつもどおり砕けた口調で「依頼人」に向かって口を開く。
「…で、依頼の内容は？」

瑠璃色　1（後書き）

大幅どころかまったく内容を変えてみました。
一人称のほうが楽しいですが、三人称のほうが進むペースが早いです…。

瑠璃色　2

「幼馴染が、酷い女に騙されてるんです。私もう見てられなくて…」
「ふーん、なるほど…」
遼太郎がメモをする。表情からどれほど酷い状態になっているのかが見て取れるほどに女性は気を沈ませていた。そんな彼女の前に光貴が淹れたばかりの紅茶を出す。
「どうぞ」
「あ、ありがとうございます。…って、私自己紹介がまだでしたね。すみません。嶋野綾(しまのあや)…えっと、２２歳です。ＯＬをしています」
「丁寧にどうもね。俺はここの事務所の所長を務める飛鳥。そこの暗いのが光貴で、あっちのでかいのが遼太郎ね」
暗いので光貴、でかいので遼太郎をそれぞれ指差し大雑把な紹介を済ませると、飛鳥は自分にも出されたコーヒーを一口啜り、口を開いた。
「騙されてる…っつってもね、状況がいまいち分からないんだよなあ…。もしかしたら本人は幸せなのかもしれないし。そこんとこはどうなの？」
「そ、それは誰が見ても明らかなんです！私、幼馴染…博人(ひろと)というんですけど、彼が教えてくれた今までの彼女に上げた彼のお金の量、全部メモしてますから見てください」
言いながら鞄から手帳を取り出し、机に乗せて飛鳥の前につつと寄せる。開けるまでも無く、手帳はびっしりと書き込まれた後だということを表紙を膨らませて知らせていた。実際、中を見てみるとそこにはずらずらと商品名と金額が並んでいる。あわせると相当という言葉では片付けられないほどの金額になるのは計算するまでも無く分かった。
「うわこれは酷いな…ちょっとお前らも見てみろよ」
「どれどれ？…お、すっげえな。ちょっと計算してくれる？光貴く

ん」
「分かりました。手帳、お借りします」
手帳を持ち、作業用デスクに向かう光貴に一礼をして、綾が飛鳥に向き合う。
「…信じていただけたでしょうか」
「あれを見せられちゃな。あと、もっと詳しい話とかできる？差し支えの無いとこまでいいから」
「分かりました。彼が女―真奈美（まなみ）さんと付き合いだしてから、もう2年も経つのですけど…。最初は真奈美さん、とても良い方でした。私なんかにも親切にしてくれて…。でも数週間して、たった数週間で彼女、人格が変わったように豹変して…。最初は、挨拶をしても無視されてしまいました。聞こえなかったのかなって思ってあまり気にしなかったんですけど、クッキーを焼いたから2人にもどうかなっておすそ分けに言ったらあんたなんかが作ったものなんて触るのも嫌と言われて。嫌われちゃったんだなって思ってその日から話しかけないようにしてたので、真奈美さんとはそれから全然話しませんでした。でも、それから数ヶ月経ったとき、博人が困ったように笑いながら家に来て…お金、貸してって言われて。私、家が厳しいからたとえ幼馴染でもお金貸せないんです。それは博人だって知ってるでしょ、他の人にあたってくださいって言ったら、彼、もう私にしか借りれないんだって…他の友達にはもう数万も借りて返せなくてって…。最初、ギャンブルでもしたのかなって思いました。でも彼、そんなところに入れるほど強い人じゃないんです。むしろとっても気弱なお人好しで、お金をそんなことに使えない人です。気になったから、何かあったのか聞きました。彼、彼女にプレゼントを贈りたいって言ってました。それで少し…勘、なんですけど。彼女にせびられたのかなあって思って。そのときはできないものはできない、ごめんなさいって帰ってもらいました。でもそれから毎週彼が来て、お金を貸してって言って来て…何かおかしいと思ったんです。だから私、彼女に…真奈美さんに会いに行きました。彼女、

とても貧相な服を着てる博人とは大違いで、綺麗な服、綺麗な髪、綺麗なアクセサリー、綺麗な宝石…色んな高級品を纏っていました。それで確信しました。彼女のせいで彼がお金に困ってるって。だから私、博人と別れてって…お金目的でお付き合いなんてしないでって言いました。そうしたら彼女、笑いながら言いました。――あんな良い金づると、そう簡単に別れるわけがないでしょうって。私、それを録音して博人に聞かせました。彼女は貴方をその程度にしか思ってない、良い思いなんてできっこないんだから別れなよって。でも彼、それでも僕は真奈美ちゃんが好きだからって聞いてくれなくて。好きなら良いって…本人達に任せれば良いって何度も思おうとしたんですけど、できなくて。彼、闇金にも手を出しそうだし…このままじゃ、博人破産しちゃいます。だから私、依頼をするためにそれからは博人に何を買わされたかメモをしてくださいって頼みました。いざというときちゃんと訴えられるようにって。彼、少し嫌そうでしたけど…頼み込んだら今までのレシート、全部くれました。それから…今までで8ヶ月くらいかなあ。それまでの分全て纏めて、彼も依頼に行っても良い、心配かけてごめんねって言ってくれたので今日来ました」

話を全て聞き終え、遼太郎が全てメモを取り終えたのを確認すると、飛鳥は紅茶のおかわりを綾の前に置かれたカップに注いだ。そして、頭を下げる綾に問いかける。

「なるほど。話は分かった。博人とやらが依頼を承諾したのも良いことだ。…それで、これから活動を始めて良いんだな？お代は高くつくぜ」

「はい！お願いします。大丈夫です、私、小学生のころからのお年玉は全て貯めているので」

「ほー俺なんかは貰って直ぐに使っちまうタイプだったけど―お、光貴くん、計算終わった？」

「はい。締めて―１５４，０３２，１４２円です」

「い、一億！？彼、そんなに使ってたんですか…」

かなりの桁に綾が驚愕の表情を見せる。計算した張本人も、計算を頼んだ遼太郎もそれを聞いていた飛鳥も驚きを隠せなかった。
「ここまで使い込むなんてなあ…俺には想像つかねえ世界だ」
かくして、驚きを隠せないままに活動は開始されることになった。

瑠璃色　2（後書き）

台詞がとても長い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2465d/

The sad boy who protects darkness

2010年10月28日08時09分発行